

工藤光一君の死を悼む

立石 博高

工藤君と呼ばせていただきます。研究者仲間であり同僚であるだけでなく、自分にとっては弟のような存在として、20年間お付き合いさせてもらい、つねにそう呼んでいたからです。

工藤君、あなたはほんとうに長いあいだ病と闘ってきました。しかし、現代の医学をもってしては、打ち勝つすべはありませんでした。あなたの健康を取り戻して歴史研究を続けたいという強い願いは、残念ながらかなえられることはありませんでした。しかし、あなたの真摯な態度は、少なからぬ同僚たちを、研究者仲間たちを、そして学生たちを感動させてきました。いまはただ、ご冥福を祈るしかありません。

工藤君、あなたの逝去の知らせを受けてぼくは、ほんとうの弟を失ったような強い衝撃と悲しみを覚えました。そしていまも、自分の心にぽっかりと開いた穴をふさぐすべを知りません。あなたのような誠実な人の生をうばいとるのが神ならば、そんな神はぼくはいりません。だが、あなたの最後の発表論文となった「噂と政治的想像界」(2013年)で取り上げたように、人間は想像界つまり想像力の世界をつくり上げ共有することができるのです。工藤君、あなたの人生は早く終わったが、あなたの「生き方の作法」は、あなたの追究された「歴史の作法」と同じく、ぼくの心に、そしてぼくたちの心に、強く刻まれています。

工藤君、あなたのことは東京外国語大学に着任するまえから、あなたの恩師であった故二宮宏之先生からよく伺っていました。誠実な人柄で、たしかに仕事は遅くて論文の数も少ないが、堅実に研究を進めており、出される成果は方法論的にも実証的にもすぐれている、ということでした。だから、二宮先生の後任人事が起こされ、あなたが候補者になったとき、ぼくは選考委員会の委員の一人として、「堅実かつ周到で、社会史研究者としての資質と条件を十分に備えている」と自信をもって審査報告をおこなうことができました。

そして1995年4月にあなたを同僚として迎えることになりましたが、それからは、ほぼ毎週のように、顔を合わせては歴史学について議論をし、

大いに勉強させてもらいました。とくに大学院では修論指導の授業を合同ゼミとして続けて、スペイン史とフランス史の院生たちに研究発表をおこなわせていました。いま思い起こすと、工藤君、あなたは一度も声を荒げることはありませんでした。でも歴史研究の方法論のことになると、厳しい先生でしたね。よく皆さんは、あなたが二宮史学の影響を強く受けていると言いますが、教育者としての真摯さは二宮先生にけっしてひけを取らなかったと断言できます。

さて、本学に着任後、あなたは教育に研究に堅実に取り組まれましたが、周到さがまさってしまってなかなか教授昇任に至りませんでした。2008年4月に教授になられましたが、その審査委員長を務めたぼくは、あえて注文を出しました。「いっそうの方法論的問いかけをおこなうとともに、やや慎重すぎる姿勢を脱して、具体的な作品を精力的につくりあげていかれることを期待したい」ということでした。あなたはその要望に応えて、間もなく「市民社会と『暴力的』農民」という論考を私たちの論集『国民国家と市民』(2009年)に寄せてくれ、19世紀フランスの農村社会の政治文化を描く作業へと本格的に取り組んでいけました。

しかし、恩師のための責務からあなたは『二宮宏之著作集』全5巻(2011年)の編集作業に没頭され、本来のご自分の実証研究を進める時間を大はばにうばわれてしまいました。けれど工藤君、あなたが中心になって組織されたシンポジウム「歴史からの問い／歴史への問い—二宮史学と歴史学」(2012年6月)は、まさに日本の歴史研究者のあいだの共有財産として遺るでしょう。このころから、あなたは深刻な病に冒されて入退院を繰り返すことになりました。それでもなおご自身の歴史学の作品を創りだしたいというあなたの研究意欲が、まだ病に打ち勝っていました。「19世紀フランス農村世界における噂のダイナミクス」(2012年)、そして「噂と政治的想像界」(2013年)です。じつは最後の論文の査読を担当したのはぼくでしたが、民衆の政治文化へと切り込む作法の鋭さに大いに感銘を受けたものでした。

8 工藤光一君の死を悼む

ですが、工藤君、あなたは病に打ち勝つことはできませんでした。奥様から「最後は穏やかな顔で眠るように旅立ってゆきました」というお知らせをいただきました。その夜、ぼくはあなたの好きだったザードの坂井泉水の歌「負けないで」を聴きながら、坂井泉水の死に涙したあなたのことを思い、涙しました。

(たていし ひろたか・東京外国語大学長)